

日本における出生意欲について

渡邊 吉利

はじめに

子供の数についての意識、すなわち、子供の数は何人ぐらいがよい、あるいは、何人生むつもりといった子供の数の選好 fertility preference についての調査は、わが国においても、戦後の早い時期から行なわれている（表1の資料参照）。

こうして選好された子供の数の水準と実際に生む子供数との間の関連性に着目して、子供数選好のデータを将来出生力の子推測に利用することが考えられた¹⁾。こうした選好された子供の数（出生意欲）をもとにした将来人口の推計は、その後も、アメリカの Census Bureau において何回も行なわれている。日本における出生意欲をもとにした将来人口の推計の試みとしては、いずれも人口問題研究所の第6次出生力調査結果に基づくもので、『希望子供数』に基づく1974年の岡崎陽一によるものと『理想子供数』に基づく1975年の伊藤達也・池ノ上正子によるものがある²⁾。

本稿においては、日本のこれまでの各種調査における様々な子供数選好指標について、将来の出生力指標（出生意欲）としての利用する立場から、その種類・定義を明らかにして整理を行なうこととする。

日本において、将来の出生力指標として出生意欲の検討を行なったものとして野原（阿藤）誠の業績がある³⁾。本稿も、主として野原の作業に依拠して、データの整理を行なう。

1. 出生意欲の種類

出生意欲の中味は質問の仕方によって区別され（表1参照）、実際に質問によって子供の数の水準も異なってくる。

出生意欲の指標は、大きく分けると、妻が理想と考える子供の数（質問の中で理想という言葉を使っているかどうかは別にして）についての意見と、妻自身が最終的に望んでいる子供の数に分けられる。

前者は、回答者自身の問題としてではなく一般的な意見の形で、あるいは、実現可能性を問わない形で、「子供は何人がよいと思いますか」とか「理想的な子供数は何人ですか」といった質問などが

1) Freedman, R., P.K. Whelpton, A. Campbell, *Family Planning, Sterility and American Growth*, McGraw-Hill New York, 1959. pp.320~372.

2) 岡崎陽一「日本人口静止の可能性」第26会日本人口学会報告資料“各種の仮定に基づく将来推計人口”（1974年5月17日）。伊藤達也・池ノ上正子「希望どおり子供を持ったときの日本人口」『人口問題研究所年報』第19号（1975年3月）。岡崎の推計は第6次出生力調査の『希望子供数』の平均2・4人に基づくもの、伊藤・池ノ上の推計は同じ調査の『理想子供数』の平均2・8人に基づくもの。いずれも厳密な意味で“予測” forecast としての性格をもつものではないと思われるが、日本では初めての試みである。

3) 野原 誠「現代日本における出生力予測の可能性」『人口問題研究』第149号（1979年1月）16~13ページ。

表1 出生意欲の種類

出生意欲:質向の仕方	調査名
『理想子供数』	<p>日本の夫婦にとって理想的な子供数…… “ideal……for the average American family” “ideal……in the country” “ideal……in general” “minimum and maximum……a family ought to have” “ideal……in the conditions of no financial or other worries” 理想としては子供は何人ぐらい…… あなたは生涯において子供数を自由に選ぶことができるか…… “……would wish to have could you begin your married life again” あなた(あなたご夫婦)にとって理想的な…… あなたご自身がほしいと思っている理想の…… “ideal……for a family whose financial conditions correspond to your own.” “ideal……in the conditions of this current household” あなたは子供の数は何人ぐらいがよいと思いませんか……</p>
『希望子供数』	<p>結婚したとき生きたい子供数について話し合 いましたか……何人でしたか “……wanted at marriage” “What number……would you really want?” “……ultimate number……you yourself want to have”</p>
『期待子供数』	<p>今(あるいは、もっと)お父さんがほしいですか……何人ほしいですか (実際に)あと何人子供をほしいと…… “How many more……do you intend to have?” (実際に)あと何人生みたいとあと…… “How many more……do you expect to have?” 何人生むつもり…… あと何人生む予定……</p>
『理想子供数』	<p>〔人口研・出産力の地域差調査(農村)1978~79年〕 [G.A.F.] [ベルギー1966年, フィンランド1971年, フランス1972年, ハンガリー1966年, ポーランド1972年, アメリカ1970年, ユーゴ1970年, トルコ1968年] [イギリス1967年, オランダ1969年] [世論調査所1949年] [世界出産力調査1974年] [ベルギー1966年, デンマーク1970年, ハンガリー1966年] [第6次出産力1972年, 第7次出産力1977年] [毎日調査] [デンマーク1970年] [イギリス1967年, フィンランド1971年, フランス1972年, トルコ1968年] [世論調査所1951年] [世界出産力調査1974年] [チエコ1970年, デンマーク1970年, イギリス1967年, フィンランド1971年, フランス1972年, ハンガリー1966年, オランダ1969年, ポーランド1972年] [G.A.F.] [ベルギー1966年, チェコ1970年, デンマーク1970年, イギリス1967年, フランス1972年, オランダ1969年, トルコ1968年, アメリカ1970年, ユーゴ1970年] [世論調査所1949年] [毎日調査, 厚生省・総理府1964年, 総理府1969年, 第6次出産力1972年, 人口動態社会経済面(出生)1976年] [G.A.F.] [世界出産力調査1974年, 第7次出産力1977年]</p>

注: GAF はプリンストン大学の Growth of American families study の略であり④の資料に基づき、ヨーロッパの調査は⑤の資料の記述に基づくもので質問票を参照したものではない。

表1 資料

- (1) 「(1949年9月)人口問題に関する世論調査」国立世論調査所(1950年5月)
- (2) 「(1951年12月)受胎調節に関する世論調査」国立世論調査所(1952年3月)
- (3) 「(1964年12月)受胎調節に関する世論調査」厚生省児童家庭局・総理府広報室(1965年9月)
- (4) 「(1969年11月)産児制限に関する世論調査」総理府広報室(1970年3月)
- (5) 「(1974年9月)世界出産力調査報告」厚生省統計情報部(1976年12月)
- (6) 「(1976年10月)人口動態社会経済面調査報告(出生)」(1977年8月)
- (7) 「(1972年6月)第6次出産力調査報告(その1)」人口問題研究所(1973年3月)
- (8) 「(1977年6月)第7次出産力調査報告」人口問題研究所(1978年12月)
- (9) 「(1978~79年)特別研究・日本における最近の出産力水準の地域差とその要因に関する総合的研究の調査結果——概報および主要結果」表人口問題研究所(1980年4月)
- (10) 「(1971年7月)毎日新聞社第11回全国家族計画世論調査」毎日新聞社,人口問題調査会(1972年5月)
- (11) 「(1977年3月)毎日新聞社第14回全国家族計画世論調査」毎日新聞社,人口問題調査会(1977年11月)
- (12) 「(1979年5月)毎日新聞社第15回全国家族計画世論調査」毎日新聞社,人口問題調査会(1979年12月)
- (13) 野原 誠「現代日本における出生力予測の可能性」『人口問題研究』第149号
- (14) Ryder, Norman B., Charles Westoff, *Reproduction in the United States 1965*, Princeton University Press 1971.
- (15) United Nations, *Fertility and Family Planning in Europe around 1970: A comparative study of twelve national surveys*, Population Studies, No.58. United Nations 1976.

ら得られる子供数であって、ここでは『理想子供数』と呼んでおこう。後者は、逆に、一般的な意見ではなく回答者自身の問題として、現在の条件の下で実際に何人の子供を生むのかを問うて得られた子供数であって、ここでは『期待子供数』と呼んでおこう。

(1) 一般的な意見としての子供数：『理想子供数』

一般的な意見としての子供数は、質問の中で「理想的な子供数は何人……」というように「理想」という言葉で尋ねているもの〔世論調査所1949年,毎日調査,第6次出産力,第7次出産力,GAFの ideal number of children,ヨーロッパ諸国の調査の ideal number of children〕と,「子供は何人がよいと思いますか」というように必ずしも「理想」という言葉を使わないで尋ねているもの〔世論調査所1951年〕がある。

また、『理想子供数』は,「日本の夫婦にとって理想的な……」というように回答者自身から少し切り離して意見を尋ねている場合〔人口問題研究所の出産力の地域差に関する特別調査1978~79年,GAFの ideal number of children,ヨーロッパ諸国の ideal number of children “in general” or “in the country”〕と,「あなた(がた夫婦)にとって理想……」のように回答者自身に密着して尋ねている場合〔毎日調査,第6次出産力,第7次出産力〕とがある。『理想子供数』は,一般に,個人の願望というよりも社会的規範 social norm としての側面が強いという見解があるが,前者の場合は特に社会的規範としての側面が強いといえよう。

ここで参照した日本の調査には含まれていなかったが,これら『理想子供数』の質問には,調査対象者自身の「経済的制約やその他の制約がないものとして……」と明示して尋ねるもの,反対に「現在の所帯の状況の下で……」と明示して尋ねるものなどがあり得る〔イギリス1967年などヨーロッパにおけるいくつかの調査〕。日本の調査は,こうした条件を明示していないが,調査回答者の側では,実際には,いずれかの条件を付けた形で理解した上で回答していると考えられる。日本において,

『理想子供数』が出生意欲のうちで最も多い子供数として表われやすいのは、この質問に対して回答者は自分自身の生理的・経済的制約条件をぬきにして答えるからだと考えられている⁴⁾。その意味で、『理想子供数』は、将来の出生力の予測能力としてはやや問題があるといえよう。

(2) 回答者自身が実際に望む子供数：『期待子供数』

『期待子供数』は、質問の形式からいうと、現存子供数（これまでに生まれた子供のうち、現に生存している子供の数）を問わずに直接的に最終的子供数を尋ねるものと、現存子供数を尋ねてから追加出生子供数を尋ねる二段の質問によって最終的子供数を得るものに分けられる。

このうち、現存子供数を問わずに直接、最終的子供数を尋ねるのは、日本の調査では例がなく、アメリカ〔GAFの desired number of children〕とヨーロッパ諸国〔wanted or total expected number of children〕の例がある。欧米諸国でも、理想“ideal”とは明確に区別して“wanted” number を質問しており⁵⁾、潜在的であれ、実際に将来の出生力を示す有力な指標とみなしている。

現存子供数を前提として「あと何人……」という質問は、より実際の判断を求めており、この質問から得られる子供数（出生意欲）は将来の出生力を示す指標として有力なものといえよう。

アメリカの intended number of children や expected number of children〔GAF〕は、こうした質問にもとづくもので、実際には living number of children と additional number of children の二段の質問からなる。intended と expected では、前者がどちらかといえば intention（希望）を現わしているのに対し、後者は expectation（予想）を現わしていると考えられる。この二つの出生意欲のレベルは、アメリカの場合は、ほとんど実質的な違いはない⁶⁾。

日本におけるこの質問による出生意欲は、質問の微妙な言い回しによって、さらに『希望子供数』と『予定子供数』に分けられている⁷⁾。『希望子供数』とは、現存子供数に『あと何人ほしいと……』あるいは「あと何人生みたいと……」といった質問から得られる追加子供数を加えた子供数である。

『予定子供数』とは、「あと何人生むつもり……」あるいは「あと何人生む予定……」といった質問から得られる子供数と現存子供数を加えた子供数である。

『希望子供数』と『予定子供数』とでは、質問の仕方の微妙な違いによって、ほぼ同時期の調査でも、子供数（出生意欲）のレベルに違いがある。より具体的にいうと、『予定子供数』の方が『希望子供数』よりも小さく、実際に実現された完結出生力水準とほとんど同じ水準である。いいかえれば、「生むつもり」の方が「生みたい」、「ほしい」よりも達成可能性の面でより厳しい判断と決意を求めており、実現性も高いと考えられる⁸⁾。したがって、『予定子供数』が、将来の出生力を示す指標としてもっとも現実的な出生意欲であるとみられる。

2. 出生意欲の動向

戦後何回か行なわれた出生意欲についての調査によって、その水準をみると（表2～4）、戦後間

4) 野原, 前掲17ページ。

5) United Nations, *Fertility and Family Planning in Europe around 1970: A comparative study of twelve national surveys*, Population Studies No.58, United Nations, 1976, p.32

6) Ryder, Norman B., Charles F. Westoff, *Reproduction in the United States 1965*, Princeton University Press, 1971, p.21.

7) 野原, 前掲17ページ。

8) 野原 誠によれば、「違いは言葉のニュアンスの差ともみえるが、“欲しい”と“生むつもり”で前者の方が生理的・経済的制約条件に対する考慮が弱く、後者の方がより強く意識されるであろうと期待されている」とされる(野原, 前掲17ページ)。

もない1949年の調査では、『理想子供数』、『希望子供数』とも子供数3～5人の割合が多かった。最近の日本では、『理想子供数』が『希望子供数』より多いのが通例であるが、1949年の世論調査所の調査では、『理想子供数』よりも『希望子供数』の方が多かった。1960年代以降、『希望子供数』2人の割合が3人の割合を超え、平均でも2人台になった。しかし、『理想子供数』では3人が根強く残り、1970年代後半の調査になって、ようやく、『理想子供数』2人の割合が3人を凌駕しつつある。

『予定子供数』は1970年代の調査だけであるが、いじれの調査においても、子供数2人の割合は54～57%と多数を占め、ついで3人の割合が25～26%、1人の割合が11～12%である。平均の『予定子供数』は、2.2人と、最近の妻における完結出生児数と一致している。

『理想子供数』、『希望子供数』、『予定子供数』の年齢別の動向については、すでに述べたことがある⁹⁾。その要点を記せば、いずれの年齢(コウホート)においても『理想子供数』、『希望子供数』、『予定子供数』の順に子供数は少なくなり、最近におけるそれぞれの子供数の水準は『理想子供数』で2.4～2.5人、『希望子供数』は2.3～2.4人、『予定子供数』は2.2人を中心に2.1～2.3人であった。

表2 各種調査における『理想子供数』の分布

調査名	世論調査所 人口問題 調査	世論調査所 受胎調節 調査	毎日新聞 第10回調査 (1969年 6月)	毎日新聞 第11回調査 (1971年 7月)	毎日新聞 第12回調査 (1973年 5月)	厚生省 世界出生力 調査 (1974年 9月)	毎日新聞社 第13回調査 (1975年 5月)	毎日新聞社 第14回調査 (1977年 3月)	研 究 人 口 第 7 次 出 産 力 調 査 (1977年 6月)	毎日新聞社 第15回調査 (1979年 5月)	
調査年月	(1949年 9～10月)	(1951年 12月)	(1969年 6月)	(1971年 7月)	(1973年 5月)	(1974年 9月)	(1975年 5月)	(1977年 3月)	(1977年 6月)	(1979年 5月)	
調査客	20～50歳の 男女	20～49歳の 男女	15～49歳の 有配偶女子	15～49歳の 有配偶女子	15～49歳の 有配偶女子	15～49歳の 既婚女子	15～49歳の 有配偶女子	15～49歳の 有配偶女子	15～49歳の 有配偶女子	15～49歳の 有配偶女子	
総数	3,088人	2,664人	3,195人	3,223人	9,355人	2,860人	3,031人	2,952人	8,299人	2,998人	
『理想子供数』の分布(%)	100 0 1 1 7 40 16 13 2 1 5 8 4 3	100 0.7 2.3 31.5 47.4 11.1 2.5 0.2 0.2	100.0 0.9 2.5 33.0 46.1 10.7 2.2 0.1 0.3	100.0 0.7 2.5 33.4 46.1 10.2 2.6 0.4 0.2	100.0 0.5 1.6 21.0 48.8 16.5 9.1 1.9	100.0 1.1 3.3 39.7 41.7 8.1 1.8 0.2 0.1	100.0 1.6 3.4 40.2 42.1 6.5 1.6 0.2 0.2	100.0 0.3 2.8 43.8 43.9 7.6 1.4 0.2	100.0 1.6 3.4 40.2 42.1 6.5 1.6 0.2 0.2	100.0 0.3 2.8 43.8 43.9 7.6 1.4 0.2	100.0 2.9 2.6 43.8 39.5 6.9 1.5 0.1 0.0
平均理想子供数	3.3人	?	2.78人	2.75人	?	3.2人	2.62人	2.58人	2.61人	2.51人	
データの出所	(1)の14ページ	(2)の5ページ	(1)の18ページ	(1)の18ページ	(7)の107ページ	(5)のP.136	(1)の18ページ	(1)の18ページ	(8)の150ページ	(12)の19ページ	

9) 青木尚雄・渡辺吉利「家族計画と出生力」『人口問題研究』第152号(1979年10月), 52～55ページ。

表3 各種調査における『希望子供数』の分布

調査名		世論調査所 人口問題調査	厚生省・総理府 受胎調節調査	総理府 産児制限調査	人口研 第6次出産力	厚生省 人口動態社会 経済面調査	毎日新聞社 第14回調査
調査年月		1949年9～10月	1964年12月	1969年11月	1972年6月	1976年10月	1977年3月
調査(集計)客 体		子供がほしい と答えた20— 50歳の有配偶 男女	20—39歳の 既婚女子	20—49歳の 有配偶女子	15—49歳の 有配偶女子	15—49歳の 有配偶女子	子供を生んだ ことのある 15—49歳の 有配偶女子
		1,110人	2,547人	2,597人	9,355人	2,743名	2,469名
『希望子供数』 の分布(%)	総数	100	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	0人	1	0.7	2.0	3.9	1.5	—
	1人	4	6.4	6.4	7.7	7.3	6.6
	2人	11	44.6	33.4	44.0	50.5	51.2
	3人	29	35.1	33.3	33.3	31.9	36.4
	4人	24	8.1	8.9	10.2	7.2	4.8
	5人	15	1.9	2.2		8.4	
	6人	8	0.7	0.9	0.3	1.0	
	7人以上	6					
	不詳	2	2.4	2.8	1.0	0.5	—
死離別	—	1.1	—	—	—	—	
平均希望子供数		3.8人	2.53人	2.52人	2.49人	2.40人	2.42人

データの出所 (1)の15ページ、(3)の52～53ページ、(4)の36～37ページ、(7)の107ページ、(6)の25～27ページ、(11)の42ページ

表4 『予定子供数』の分布

調査名		厚生省 世界出産力	人口研 第7次出産力
調査年月		1974年9月	1977年6月
調査(集計)客 体		妊娠可能な 有配偶女子 2,297人	有配偶女子 8,259人
『予定子供数』 の分布(%)	総数	100.0	100.0
	0人	2.2	2.3
	1人	12.2	11.2
	2人	53.5	56.6
	3人	25.9	24.7
	4人	3.9	2.9
	5人以上	1.7	2.2
不詳	0.8	—	
平均予定子供数		2.22人	2.23人

データの出所 (5)の142ページ、(8)の159ページ